
新魔法物語 リンディ戦記

リリィ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新魔法物語

リンディ戦記

【Nコード】

N2351Y

【作者名】

リリイ

【あらすじ】

一人の少年が仕事に恋愛に他いろいろがんばるお話。

リンディ主人公ものではありません。

旧タイトル

なのは？フェイト？オレは、リンディさんルートを選ぶぜ！！

プロローグたりえるプロローグ（前書き）

リンディさんルートが少ないから書きます。

宜しく願います。 m ((m

プロローグたりえるプロローグ

人と言うものは必ず1つぐらい夢を持っている、たとえば、『美味しい物をたくさん食べたい』、『あの人と付き合いたい』、など必ずあるし、そのために努力もするし、その夢を形にしようとする、ならば、今、自分が置かれている状況もまた、人の夢が形に成ろうとしているところなんだろう。

まあ、結局何が言いたいかと言うと

自分の夢を叶えようとかんばるのはいいが人様の仕事を増やすな！と、俺は思う。

というか、俺を見習え！ああっ嫌な声が聞こえて来る。

「隊長！もう持ちそうに無いです！！」

俺の思考（至高）タイムを邪魔しやがったのは、俺の副官的ポジションに要ることが多いメガネだ、俺の思考（至高タイム）を邪魔したヤツはこんな説明で十分だ。

ただ、今の状況が思わしく無いのも事実、アレだ、絶対、アレだ、朝の目覚めが特に悪かったし、朝食のメニューの品数が多かったからだ、クソが！

でも、リンディさんに朝、挨拶されたのは良かった。嬉しいかった。最高だった。朝のイライラが一瞬でなくなった。今、この所をよんでいる人は、もうわかっただろう。

俺は、今、恋をしている。

まあ、だからなんだ、と、思うかもしれないが俺にとってはとても重要で、だから今、説明しているのだ！（誰に？）

はあく、現実逃避はやめて考えるか、状況確認をすると今、敵拠点の制圧中だ、その指揮をしているが、何故か通信が入り難い上に敵の展開が早い、確かにこういった所だと通信が聞き取りづらかったりするが、なにか可笑的い…

「敵の展開が早いことが気になる…」

「隊長の指揮が的確だったことなんてないでしょう！！」

「何だとっ！このメガネがっ！！」

隊長をバカにしゃかってっ！

「ほらっ！ そうやって子供のように罵倒するからいつまでたっても、評価が得られないんですよっ！」

「だったらどうしろっていうんだっ！ 支援だって期待出来ないし
」！
」！

「それを考えるのが隊長でしょ！？」

「だったら、その隊長を補佐するのが、副隊長だろっ！」クソがっ
無能のやつがいろいろいいやつて！

「あなたは何時もそうやって僕の責にすればいいだからいいですよ
ねっ！！」

でも、そんな言い方してるから隊長だなんて肩書き身分不相応だな

んて思われているんですっ」

「……もういい」

くそっやっぱり今日は、最悪だ……。

「っ……すみません……」

……クソっ

…落ち込んでいる場合じゃない。

今、この状況をどうにかしなければ。

「A小隊、B小隊、引くぞっ!!
引いて立て直す!!」

『了解っ!』 『了解っ!』

「行くぞ、メガネ!!」

「了解!!」

「その必要はないよ」

『……っ!』

「クロノかつ!」

これで仕事も終わりだな、クロノがくればこのまま押しきってまでもだ
いじょうぶだろう。

……複雑な気分だが。

プロローグたりえるプロローグ（後書き）

クロスボーンガンダム面白かった。

フルクロスかつこいいい！！

「悪いお知らせといいお知らせどちらがいい？」
「そういつてクロノが俺に問いかけてくる。」

「……聞きたくないが。」

だが、聞きたくないとって聞かない訳にはいかない。

「……じゃあ、いい方から」

「分かった。」

まず、いい方からだが、今回の通信障害だが詳しくわかっているわけでもないが、意図的にされていたものらしい。」

「……なんだって、
本当か？」

「どうやらそうらしい。まだ、全然わかってないがな。」

もしそうだとしたら。

「そうだ、いろいろ不味いことになる。」

まあ、今回は撤退に使われたただだったから良かったようなものだ。」

「今度出てくるときはそういった状況下を想定した戦術などやって来るってことか。」

「ああ、そうだ。」

今日は、やけに理解が早いな。ウィル」

「……………馬鹿にしてるのか？」

「そうじゃない、褒めているのさ。」

「……………ふんっ、いい知らせは？」

クソ嫌味野郎が、いつか俺の靴を舐めさせた上でゲイの野郎をけしにかけてやる。

「ああ、だが、このことが詳しく分かれば質量兵器の強みが少なくなる。」

「まあ、ミサイルや核ミサイルの誘導ができなくなるからな。」

だが、それだと犯罪者どもにとつたら痛いところだろう。

なのに、なぜ？

こんな事件で発覚するんだ？

「まあ、いろいろとまとめないといけないから、これから艦長と会議だ。」場合によっては、急をようするかもしれないからな。」

……………なんだとッ！

かつ…………艦長と会議！

不味いぞ、凄く不味い！

どうしよう？

一（後書き）

ル・シーニユかっこいいなあ、ガンダムタイプのMSでありながら他のガンダムタイプにはない女性らしさを感じるデザイン！

一話、庭、二羽（前書き）

リンディさんの描写を頑張って書きました。（笑）

一話、庭二羽

今、どうしよう？

どうしよう？

行くか、逝かないか、逝くか。

淒く悩む。

………よしっ俺は逝くぞー！

リンディさんのもとへ！

「どうしたんだ、ウイル？
だまつたりして？」

うさっい馬鹿。少しくらい時間をよこせー！

「…いや、何でもねーよ。」

「…？まあいい、いくぞ。」

「命令するな。」

「上官だ」

「失礼します。」

「来たわね。」

さっ座つて、今、お茶出すから。」

遂に来てしまったか……

この時がッ！

入ると茶室というらしい空間は、この艦の内装からは、絶対に想像出来ない光景が広がっていた。

明らかに違う内装だ。俺もミッドチルダに住んでいることもあり、やはり、床に座るといふ概念は慣れない。

だが、今、目の前にいる人物をみたら、その感想は吹き飛んでしまった。

なんとさえいいだろう。

この茶室という空間は俺と同じミッドチルダに住む以上、余り、触れる機会はない、にもかかわらずこの場所は自分のテイトリーだと、言わんばかりの自然な雰囲気は彼女はかもし出している。

茶室という緑が映える空間だからか、その、まるで無数のエメラルドの一つ一つを細かく伸ばし一つに束ねたかのような、美しい緑色の髪は今、この雰囲気と、とても合っている。ポニーテールにしていることで動くことを視野に入れていることがわかる。

が、その美しいさは失われてはいない、逆にその美しさに機能美という、決して芸術的美しさを追求したら手に入らない、美しさとは

字が同じでもまるで違う美しさを手にしている。
が、決して髪の新しさが突出している訳ではない。むしろその本人
美しさをより、レベルの高いものへと昇華させている。整った顔立
ちは一目では、この人物が決して自分より何倍も年齢が離れている
ことなど、決して分からないだろう。

整った瞳は大人の余裕をかもし出していながらもまるで少女のよう
な、好奇的な視線をたまにこちらに向けて来ており、正直落ち着
かない。

恐らく、自分達に緑茶をご馳走してくれるのだろ。(本当は抹茶だ
が。)

「艦長僕にお茶はいりません。

お一人でどうぞ。」

クソッ！やるな、クロノ自分であの緑茶を回避するとはッ！

正直あの緑茶と言う飲み物は美味しくない、そもそも何故、お茶に
砂糖を入れるのかわからない。きっとリンディさんのことだから、
その飲み方が正しいのだろうが、一杯飲めば一発で糖尿病予備軍の
仲間入りだろう。

「じゃあ、ウィル君はどうする？」

はいッ終わったー！！

俺の健康終わったー！！

あの、期待した瞳に見つめられたら断ることなんか出来るわけない
だろうー！！

嗚呼ッ健康診断に引つかからないことが一つのささやかな自分だけ
の自慢だったのに……………。

「…………いえ、頂きます。」

「そうッ？」

なら、ウィル君の分もださないとね。

うちのクロノと違ってウィル君は私が出すもの毎回頂いてくれるものね。」

毎回の事だが、クロノが俺に信じられない物を見たかのような視線を向けてくる。

……………もう、慣れた……………。

二話、庭、二羽（後書き）

第08MS小隊の漫画版を読んだ。

アニメと違った印象を主人公に受けた。

ノリスあっけなすぎ。もう少し活躍する所を見たかった。（泣）

三羽、三和、三話

一言で言うならそれは、拷問だった、なまじ、本物の拷問と違ってイヤだ、やめたい、などを言うことが出来ないからより、性質としては災厄であり、最悪だった。

でも、恋に障害は付き物だと勝手に思い込むことしか、今の自分の忍耐力を維持出来ない、そんな状況だ。

「どう？美味しい？」

……嗚呼、その笑顔が今、この状況でなければどれだけ嬉しいことか。

この歳でこれ程、人生の理不尽を身をもって経験しているものも少ないだろう。

つていうかクロノいい加減その目線を止めるッ！もう、その目線いから、2話だけで充分だから。

「……………結構なお手前で」

……口の中であのお茶の何とも言えない甘さが残っている。
……つていうか後味しつこ過ぎるんだが。

「……………どうだった？」

俺にリンディさんが期待と不安を合わせたかのような目線をこちらに向けてくる。

「…………美味しかったです。…………甘味が深くなっていたような印象を受けました。」

「そう？やっぱり、砂糖の種類を変えたのと、量を多くしたのがよかったのね。」

また、量が増えただとツ！？

「私も前よりこっちのほうが好みだわ。」

嬉しそうなあの笑顔、この笑顔を見れたなら、俺の健康診断の結果なんて、些細なことだ。

「さて、世間話は、ここまでにして、来て貰った理由は、解ってると思いますが、これを見て下さい。」

リンディさんの顔がさっきの笑顔とは、うって変わって真剣なものになる、この雰囲気でこの場の空気も真剣なものになる。やはり、艦長と言つものものは、その言葉、雰囲気、表情で場を支配することが出来る能力を持っているからこそ艦長という責任者に成れるのだと思つた、その真剣でクールな所と普段の少女のような笑顔とのギャップ。

……………たまりません。

三羽、三和、三話（後書き）

第08MS小隊の小説版でも読みましょかね。（笑）

四つ葉のクローバーってマメ科の植物なんだよね、確か。(前書き)

ついに登場!!通信障害の原因っ!

四つ葉のクローバーってマメ科の植物なんだよね、確か。

さて、プチ興奮するのはここぐらいにしておこう、真面目にやらないと俺の評価が落ちるかも知れないからな。

「やはり、先ほどの戦闘ですか？」

クロノがリンディさんに問いかける。

やはり、親子だからなのだろう、この切り替えの早さにはたまに付いて行けないことがある。

だが、誰が今のこの雰囲気から親子の会話だとわかるだろうか。

正直、俺はあの親子の親子らしい会話などリンディさんがクロノをからかっているところしか見たことがない。

やはり、クロノがなにかしらのコンプレックスを持っているからかもしれない。

「ええ、そうよ。これを見て。」

そういつてリンディさんがこちらに一つのファイルを見せてくる。

「これは？」

「現場にまだ僅かに残っていた物です。」

「これは……粒子？」

そうか、これがあの通信障害の原因か。

「ええ、この特殊粒子はどうやら通信障害の原因でおそらくAMFの原因なのではないかと言われているものらしいの。だから、私達はこの特殊粒子を暫定的に『AM粒子』と呼ぶことになりました。」

「AMFってアレですよ、魔法を無力化してしまうっていう。」

「正確には魔法結合を解いてしまう現象だ。」

クソっカッコつけやがって。

「ええ、その現象よ。」

特定の世界などでも起こったりする現象なんだけど、そういった世界では結構ありふれた物なの。」

「そして今回、あのグループがその粒子をばら蒔いたと。」

「ええ、でもその粒子を使ったことはそれほど重要ではなくて、問題なのは、恐らくこの粒子を人工的に生産と戦術規模での散布が可能だということよ。」

「なぜ？」

人工的に生産したということがわかるんですか？」

「AM粒子のある世界から持ってきたら手間だっただけかかるし効率的ではないからよ。」

それにこの粒子は一度、散布したからといってずっとその空間にある訳ではないの。」

だから、それこそ戦闘するなら一定時間ごとに散布し続けなければ、通信出来ない空間での戦闘なんか無理なの。」

なるほど、デリケートな粒子なのか。

四つ葉のクローバーってマメ科の植物なんだよね、確か。(後書き)

今日は ガンダムを見た。

富野節が映える映える。

こんなセリフの回し方をしてみたい。

自分の中での戦隊物は5人(前書き)

本編開始時(一期)のクロノの年齢がわかる方がいたら教えていただけませんか。

教えていただけたら嬉しいなど。

自分の記憶が正しいければ14歳だったような？

自分の中での戦隊物は5人

しかしそうになると、いろいろと不味いことになるのではないか？
今の、管理局の中にこういった状況下での戦闘経験やノウハウなんか殆どゼロだろう。

「私は、この状況を重く受け取っています。
今回の事件でこのことを知ることができたのは幸運だったと思っています。」

まあ、何も知らず聞かされず、ハイ、戦場なんて絶対にイヤだからな。

「では、艦長、この事どのように処理するつもりですか？」

あっ俺のセリフ。

……取られた。

「ええ、この事は、既に管理局上層部に報告しました。」

「そうですか、失礼しました。」

「いえ、クロノ執務官が心配になるのも仕方ありません。」

なら、安心だろ。

後は上がどうにかしてくれるぞ。

しかし、管理局上層部はこの事で質量兵器の脅威が少なくなったと判断しこのあとの1年後に第1管理世界『デズン』第2管理世界『イスミカ』が管理局に対し宣戦布告、戦争が始まった。

自分の中の戦隊物は5人(後書き)

『なるほど、豆知識』

メタスのビームサーベルは6本装備されている。

なぜ？

6羽でくも七面鳥 (前書き)

主人公の年齢は、クロノと同じ年です。

6羽でくも七面鳥っ

今、俺は管理局の次元航行部隊本局の局員食堂にいて、1週間くらい前に次元航行を終わらせてきて今は、待機中だ。

待機中だとしてもやることは沢山ある次元航行任務中に起こったことなどの報告書の作成と提出、戦闘訓練やデバイスの調整や整備などいろいろとある。まあ、デバイスの整備などは自分の手に負えない物などはデバイスマスターにやって貰ったりしないといけない。そして、デバイスマスターにやって貰う場合はいろいろと提出物が必要になる。

非常にめんどくさいことしかない。だから、俺達のなかでは、『雑務中』などと呼んでいるヤツもいる。

まあ、こうした雑務は管理局員の華やかなイメージにそぐわないし、地味だからしかながないかも知れない。

さて、無駄な思考は、止めて朝食でも食べるか。

やはり、本部の食事はいい。次元航行任務中の食事は積み込む容量に限られて来る分、ここの食事と比べれば天と地の差だ、やはりメニューが多いと豪華な気分になる、まあ、全部食べることは出来ないが。

本部食堂は非常に大きいなんせ、この本部にいたい人の人はここで食事を摂るからだ、一体どれくらい高いか見たとしても分からない高さの天井、しかし高いからといって決して不自然に思わせないように天井では朝の爽やかさ、とでもいのだろうか。

そういった自然の朝の森みたいな映像が流れていて、その映像の雰

困気に合う音楽が決して自己自重しないレベルの音量で流れている。

今日は珍しく寝起きもいいし、いい日になるだろう。今日は1週間くらいたったのだから、リンディさんにいろいろとアプローチをかけるのもいいし、そういった計画を練るのもいい。

兎に角早目に今日の仕事のノルマを終わらせることにしよう。

『……昨夜に……第一……』

……なんだ？騒がしい？
何があつた？

「隊長、昨日あつた。ニュース見ました？」

「なんだ、メガネか。」
「つまらん。」

朝、最初に見たのは、こいつの顔かよ。

「……相変わらずですね……。」

「どういたしました。で、どうした？」

「……ですから、昨日のニュースですよ。」

「ニュース？なんか、あつたけ？」

「はあ、第一管理世界『デズン』と第二管理世界『イスミカ』が管理局に対して宣戦布告したことですよ。」

「……………何それ？いつ頃にやってた？」

「だいたい管理局標準時間10時くらいか11時くらいですかね。」

「なんだ、そんな時間なら起きてねーよ。」

「そんな、時間っていつも何時ごろに寝てるんですか？」

「うんくん、9時くらいかな。」

まあ、自分でも早いとは思うがまだ歳が歳だからな。

背が低いときつとリンディさんにも魅力的に映らないだろう。

「……………そういう所だけは年相応なんですね……………」

「まあ、10歳だしな。」

6羽でくも七面鳥つ (後書き)

もし、このあとがきを読むナイスな人達がいるならこのあとがきを少しでも有意義な物にするために、豆知識を書こうと思います。

是非この知識を学校や会社や家の人に言って優越感に浸るのもいいかもしれません。

『今回の豆知識』

5円玉に穴が空いているのは、昔は五円玉に使われていた、真鍮が高価だったので材料費などの節約のため。

たしか、そうだったはず。

違ったらごめんなさい。 m (((m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2351y/>

新魔法物語 リンディ戦記

2011年11月23日23時47分発行